



第163号
 発行所 上高井教育会
 発行人 上高井教育会長
 富澤慶吉
 編集人 会報編集委員長
 黒岩幹夫
 印刷所 須坂新聞社

特集

研究発表会・女教師研究 大会を終えて

研究発表と実践報告

十一月二十六日(日)、須坂小学校視聴覚室において、第十六回研究発表会が開催されました。

本年度も研究の成果を三名の先生方に発表していただきました。小布施中学校の五味綾子先生には、奉仕活動委員会と生徒とともに活動したことに、森上小学校の山岸信之先生には、須坂藩の初代藩主・堀直重と、十三代藩主・堀直虎について。また、墨坂中学校の鷺田俊一先生には、カラ類(鳥類)の、混群内の社会構造について。それぞれ資料やスライドを使いながら分かりやすくお話し頂きました。

また、十二月一日(金)には、

奉仕活動委員会の取り組み

五味 綾子

「中学生の皆さん、いつもいつもご苦労様です。皆さんのおかげで、気持ちの良い日があります。皆さんの見る度に、息子が小さかった頃の姿と重なって、昔の元気だった頃の気持ちにもどれて、一時楽しい若やいだ気持ちになります。これからも、勉強に運動にはげまれて、大人になっても今のままの弱い人になりたいわやさしい気持ちを忘れないでください。」

奉仕活動委員会では、様々



への参加を通して、交流を深めています。参加する生徒は委員だけでなく、全校生徒から希望者をつとめていて、毎回30〜40名の生徒が参加しています。中には、毎回の様に顔をみせる生徒もいます。ひとり暮らしのお宅への訪問は、今年から始まりました。数年前から行われている小布施荘への訪問と違い、わからないことの連続で、生徒も私も全く手さぐりです。現在までで、四回の訪問を実施、のべ13件のお宅を訪問しました。3〜4人で1グループを作り、数日前に電話で連絡をとり訪問しています。最初の訪問後の生徒の声を聞くと、「あまり話すことがなくて困った。緊張していろいろ話せず楽しんでいただけたか心配。」と、初めてのこともあって大変だった様子。しかし2回目になると、「1回目より話しがはずんでよかった。おばあさんがとても喜んでくれて、こっちもうれしかつた。」と、笑顔で話してくる生徒がふえてきました。

高齢化が進みます進む現在、老人福祉の充実が大きな社会問題になっています。奉仕活動委員会の活動が、少しでもお年寄りの生きがいや、中学生のお年寄りへの理解の深まりに貢献できればと思います。

私自身、早くに祖父・祖母を亡くしたためお年寄りとの話すという機会はこの委員会の顧問になるまであまりありませんでした。引き継いだ当初は、生徒が感じているように、何を話していいものやら、とまどいの連続でした。今では、顔見知りのお年寄りが増え、生徒以上に訪問を楽しんでいます。

先月、小布施荘を訪問した時の帰りぎわに「先生、私が帰ろうとしたら、おばあちゃんが私のことおがむんだよ。ありがとう、ありがとうって両手をあわせて。なんか本当に来てよかったと思っちゃったよ。」と言う生徒がいました。私が訪問のたびに感じている「来てよかった、また来よう。」という気持ちをこの生徒も感じていることをとてもうれしく思いました。この気持ちのくり返しが、二つの訪問活動の大きな支えになっていることを改めて感じました。これからもたくさん生徒が充実感ある訪問ができるよう活動をすすめていきたいと思っています。

(小布施中)

蘇った直重の墓

山岸 信之

須坂藩初代藩主、堀直重は元和二年(一六一五)六月、千葉県佐原市内で急死した。香取神宮で行われた奉納相撲の帰途、暴徒に襲われて殺されている。享年三十三歳。前年の大阪夏の陣で戦功を挙げ、一万五十三石の封土を須坂の地に受け、意気揚々としていた矢先であった。

死因がはっきりしない。当時、千葉県一円は日蓮宗の勢力が強かったため、宗論争いか、香取神宮との領地争いが考えられる。遺体は佐原市内の曹洞宗新福寺に殉死者二名と共に埋葬された。

一方、新福寺の近くに、昭和末年まで住職不在の、日蓮宗宗勝寺があった。小島日孝上人は、檀家総代からの住職就任要請により、重い腰をあげて、平成元年に宗勝寺を訪れた。その荒廃ぶりは、目をおおむらひに。二干坪の敷地は孟宗竹に覆われ、本堂の内陣は倒壊し、諸仏は散乱。お勝手は、孟宗竹が床をつき抜け、間々にへビの抜け殻・ヤモリの死骸等がちらばっていた。まさに、お化け屋敷そのものであった。あまりの荒廃ぶりに、そのわけを土地の人に訪ねた。すると、「いつ頃からか殿様の墓が墓

地から消えて、以来住職には不幸な祟りが続いて、だれ一人、住職の着き手がいなくなってしまう」という話を聞かされた。日本の僧職の世界では、三人に一人しか住職になれないという。それでも、宗勝寺の住職には誰もなりたがらない。直重の戒名は、「宗勝入居士」である。寺名と戒名が一致する。消えた大名墓とは、直重の墓であることは、容易に察しがつく。

更には、工事開始半年後、大工の棟梁が、作業中に脳内出血で死亡。初七日の日、二人めの大工が急死するという事件が続いた。大工たちは皆、「金はいらない。仕事から手を引かせてくれ」と言っており、逃げ出してしまった。棟梁の未亡人に励まされて何とか大工たち集め、トラック一台分の塩をまいて、工事を再開した。やがて旧墓地の地下1m付近・7m四方で巨大な墓石の一部がパワ―シャベルに当たった。丁寧に掘り起こし、一升ビン二本で洗ってみると、何と直重の戒名が刻字されていた。続いて、二代直升はじめ二十基程の墓石が現れた。出土した土で整地し、供養した直後、三人めの大工が屋根から落下した。大けがは避けられないはずなのに、鼻血とこぶと気絶だけで済んだ。不思議なことだ。

更にその年の秋、檀家の一軒で、上人が偶然に直重没後五十年めに表装された、直重の肖像画を発見した。二百年近く、埋没していた直重の墓と祟りとの関係が佐原には続いた。直重自身は、生前一度も須坂の地を踏んだことはなかった。平成六年六月、はじめて上人の手で直重は肖像画の姿で須坂に来た。須坂の封土を得てから、約三百年後のことである。

戦国末期の典型的な武功派大名直重は、本領須坂の地を得ることが生涯最大の役わりであったかも知れない。須坂の館町は、二代藩主直升によって行われた。(森上小)

カラ類の混群内社会構造

鷲田 俊一

カラ類とはシジュウカラ科、エナガ科、ゴジュウカラ科、キバシリ科に属する鳥の総称である。これらの科に属する鳥はしばしば二種以上集まって混群をつくり、行動を共にすることがよく知られている。

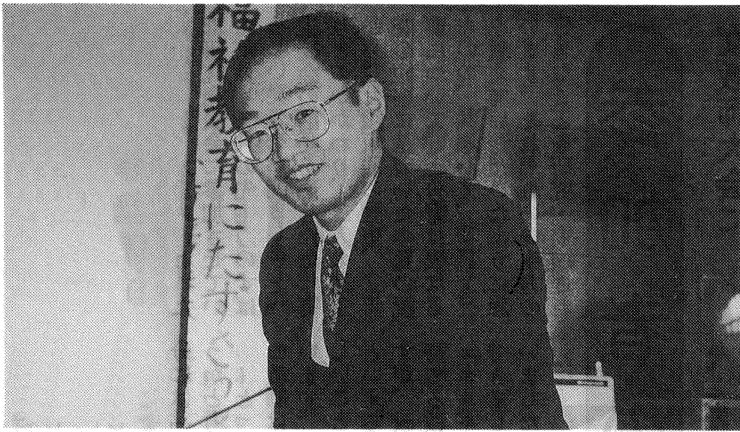
これまでにカラ類の混群は、各種が食物とその採食場所を違えるといった生態的分離によって共存していることがわかっている。日本における混群の生態的分離については中村(一九六七)による研究がある。

この研修の目的は次の三つとした。第一に混群の状態が妙高高原では他の地域とどう違うかを調査することにした。第二にこの調査地の混群も生態的分離があるのか確かめるとともに、他の地域の生態的分離とどう違うかを調べることにした。第三に混群の構成種間の関係を詳しく調べる意義について考察することにした。

調査地は新潟県妙高山山麓に広がる妙高高原内の標高七〇〇〜七四〇mの混合林とした。調査地の面積は約〇・二〇km²である。調査地では十二月上旬から三月下旬まで根雪となり一mから二mの雪がある。

②生態的分離の様子 採食する場所による生態的分離を見るため、混群各種の採食する樹種とその樹木内位置および採食場所の記録を行い、結果はカイニ乗検定により処理した。次の二つによる





生態的分離が見られた。
 (1)各種の個体数と種構成の季節的変動による分離
 (2)各種の採食する樹種と樹木内位置による分離
 (2)の生態的分離は各種の採餌方法の違いと密接に関連しており、春より冬に著しかった。混群を作らない繁殖期にはテリトリー形成による水平的な分離をした。

これに反応し、動きを止め静かになったり、ヤブに逃げたりした。警戒音を発する種はコガラとシジュウカラが多かった。第二に餌に関する利益である。餌を採食中の他個体をどかす争いが多く見られた。よく押し退ける種とよく押し退けられる種があった。また餌条件が悪くなる十二月〜三月に多くの争いが見られた。このほかに他個体が追い出した餌動物を採食するとか、他個体の採食した残りの餌を採食するといった一方には利益になるが、一方には益にも害にもならないといった一方的な関係もみられた。

以上のように混群をつくることによる利益は多くあった。このことから混群とは、付近の鳥が同一の場所で採食するために偶然にできるのでなく、各種がお互いに引き付け合うことにより、必然的にできるものであると思われる。また混群をつくることによる利益が多いため、混群は繁殖期を除く長期間形成され、多くの種が混群に加わると考えられる。

(墨坂中)

女教師研究大会から

私たちがと学校づくり

—明日への希望につながる

大草 政子

研究会を求めて

上高井の女教師の研究は、今年で十五年目になります。過去三年間は、会員一人ひとりに魅力ある研修を求めて、音楽・図工・体育・パソコンの実験などの研修会を設け、百名近い会員の参加を得て行われてきました。会員からは

「自分に謙虚さが欠けていたことに気がついた。」「思いやりの大切さに気づいた。」「等々素直で素晴らしい感想があったからです。」

明日への希望が持てることは、研修で得られる一番大切な事ではないでしょうか。研修したら、方向が分かった。」「研修したら、案外出来るかもしれないと思った。」「ということが、大事ではないでしょうか。」

男性に比べ、研修の時間も制約され、たくさんの方の困難をかかえている女教師だからこそ、女教師の研修はそんな風でできたらと考え、このフリートークを今年度の研究大会の内容に据えました。

そして、女教師が五〇%以上という時代における女教師のあり方を自分たちで話すことから探ってみようと考えました。それが、今日の課題、私たちが、どのように学校運営に参加していくか。」「私たちと学校づくり」です。

資料は、全会員にお願いしたアンケートをまとめたものです。昨年度に比べ、あまりに多くの回答を頂き、正直考

察は加えられない状態でした。女教師自身の関心も高いことが予想されました。

七つの分散会では、校長先生方が助言者でしたので、参加者にはそれぞれ、楽座で話して頂くことをお願いしました。なぜなら、立派な結論ではなく、形ばかりでなく、本音で語ることをからしか本当の明日への希望は生まれてこないということ委員会では考えたからです。その意味において、白熱した本音のおつきあひ合う分散会になったことを私たちは、参加者の皆さんに感謝すると共に拍手を贈ります。

分散会では、学校運営に私たちの声を反映させていこう。若い時からもっと専門外のことも目を向けていこう。自分なりに納得するやり方により、改善もされていく。などの積極的な公務分掌に関わろうとする意見。結婚・子育て介護などの壁を乗り越えるには、家庭や夫・仲間の精神的協力が大きな支えである。等、家庭と仕事の両立に関する意見。

また、男性・女性でなく、小中幅広く経験することで、互いに理解し合い、支え合い、教え合うことが理想。他校の先生の意見が聞けて、参考にしたい等の声もありました。

助言者の先生からは、女教師の仕事に対する真剣さを感じた。与えられた仕事は積極的に受けてがんばってほしい。

「自分が謙虚さが欠けていたことに気がついた。」「思いやりの大切さに気づいた。」「等々の素直で素晴らしい感想があったからです。」

「研修したら、方向が分かった。」「研修したら、案外出来るかもしれないと思った。」「ということが、大事ではないでしょうか。」

男性に比べ、研修の時間も制約され、たくさんの方の困難をかかえている女教師だからこそ、女教師の研修はそんな風でできたらと考え、このフリートークを今年度の研究大会の内容に据えました。



(豊丘小)

「らしさ」を 持てる教師に

中沢敦子

十一月二十六日に行われた郡研究発表会に参加させていただきました。三人の先生方のすばらしい発表をお聞きしました。生徒会の活動を通してお年寄りとかかわり、二人の藩主から見た須坂藩の歴史、二年間の観察に基づいた小鳥の混群について、と分野は異なるものの、共通して、「らしさ」を教えていただいたように思います。それぞれの先生方の好きなことを研究・実践され

課題を持っておられる姿に感動しました。先生方の感性、「らしさ」が表われていると思いました。

(高山小)

参加者の声

女教師大会に

参加して

杉山貴子

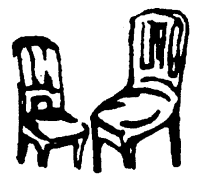
十二月二日の女教師大会では、八つの分散会に分かれて話し合いが行われました。私が参加した分散会では自己紹介を兼ねて、日頃悩んでいることを話すことから始まりました。「学校の仕事、家では妻・母としての仕事。結局、睡眠時間を減らしている。」といった悩みや、「一人の今も大変なのに結婚したら、子供がきたらどうなるのか不安」などの声もあり、仕事と家事育児をどう両立させる

か、話題の中心となりました。私自身も結婚したばかりで、何かと独身とは違うなあ(日常生活はもちろん、まわりの人の見る目も)と感じていたので、先輩の先生方のお話はとても参考になりました。中でも励まされたのは、ある先生のご発言です。「結婚や子育てに不安を持つ方が多いようですが大丈夫。何とかなるものです。」

(井上小)

花壇づくり

日井 哲



初めて中学校教師になって

松橋 徹

この冬は、比較的暖冬になりそうな予報を聞くと、ほっとする思いである。昨年の冷夏とは対照的に、今年の夏の暑さは全く異常であった。学校の昇降口を飾るサツキがあとという間に茶色になりはじ

り、ドウダンツツジや何十年も経った樹木まで、枯葉が目立つようになった。こんな悪条件の中での花壇づくりは本当に大変だった。

五月の半ばに蒔いたマリィゴールド・アゲラタム・サルビアの苗も順調に成育し、六月の初めには、子供たちの手も借りてサルビア六百本ほどをポットに移す。例年のような梅雨に恵まれず、農園のサツマイモも水くれに忙しい日が続いたが、六月二十日頃から久しぶりの雨と曇天が続いたのを機会に、北校舎南側の花壇へ一週間ほどかけて、定植を完了する。色彩の効果も考えて、花壇の前列からアゲラタム・マリィゴールド・サルビアを二列というように植

えるが、チューリップの球根が埋まっている列の間へ植

の子らと共に水くれの格闘が続き。でも、幸い今年台風は少なくて、九月の半ばを彩ってくれた。(須坂小)

今まで小学校しか教えた経験がなかったが、この四月から中学校で英語を教えています。最初の頃は何事も初めての体験であり、毎日が緊張と不安の連続であった。

また、人からは「よく中学へ行ったね」とか「中学はどうか」などと聞かれることが多かった。しかし、中学はこうですと答えることができません。「大変だけど、なんとかやっています」と答えています。まだ中学に勤務して数ヶ月足らずで中学はこうですということは、できませんが、今までのごく短い中学校での教師としての体験の中で感じたことを書いてみたいと思います。

中学校において一番難しいと感じているのは生徒指導の問題です。生徒たち一人ひとりは素直でよい子ですが、集団になるときまわりを破ったり、悪いことを平気ですることが多くみられます。しかし、その時の指導がとて難しく、毎日その対応に追われたり、生徒の心をとらえた指導ができにくく苦労しています。この生徒指導がきちんとされないといは学級が荒れてきた

(東中)